

*** 今日の健康(3月)***

< アクトヒブ(Hib)ワクチン >

Hib「**ヒブ**」とは、ヘモフィルス・インフルエンザ菌b型(Haemophilus influenzae type b)という細菌の略語で、頭文字をとってHibと記します。冬に流行するインフルエンザはウイルスで、Hib(インフルエンザ菌b型)は細菌なので全く異なります。Hibの名前の由来は、ウイルスの検査ができなかった頃、インフルエンザ感染症の患者さんから見つかって当時インフルエンザの原因菌と考えられた為このような名前が付けました。

< インフルエンザ菌b型感染症 >

Hibは人から人へ飛沫感染し、とくに5歳未満の小児の鼻咽腔に保菌されにすることがあり、発熱・嘔吐・頭痛(不機嫌)などを主な症状とし、髄膜炎や敗血症・急性喉頭蓋炎などの深刻な病態を引き起こします。髄膜炎は、他の原因菌による細菌性髄膜炎に比べて重症化し、約5%が死に至り、生存し得ても20~25%に様々な後遺症(発達・知能・運動障害・難聴)を残す可能性があります。

日本の感染症発生動向調査において、1999年4月-2001年12月に国に報告された細菌性髄膜炎患者763例中、病原菌名も国に報告されたものは約半数で、Hibが143例と最も多く、肺炎球菌が90例でこれに次いでいます。以下、B群レンサ球菌2例、大腸菌14例などでした。年齢層では0歳が29%、1-4歳が29%と0-4歳で半数以上を占めています。

諸外国では、10年以上前からHibに対するワクチンを定期予防接種として接種し、Hibによる感染は100分の1程度に減少しました。WHO(世界保健機関)は乳児への定期接種を推奨しています。

罹患しやすい年齢は母親からの移行抗体が消失する0歳(生後3~4ヶ月頃)から1歳頃までで、2~3歳からは徐々に自然免疫が発達、あるいは不顕性感染による抗体獲得により5歳を超えると罹患率は減ってきます。また、治療ではメイアクトなどのHibに対してある程度効果のある抗生物質もあります。

< 接種方法 >

Hibワクチンは、2ヶ月から接種するお子さんには3回+1年後に1回、ジフテリア・破傷風・百日咳三種混合ワクチン(DPT)と同じスケジュールで4回接種します。DPTとHibワクチンを別々に接種すると、接種回数が多くなり他の予防接種スケジュールとの兼ね合いで接種しにくくなるため、欧米ではDPTとHibワクチンは同じ日に各々左右の腕に同時接種されています。

今回導入されるHibワクチンは日本で初めて同時接種が認められたワクチンです。

また、Hibワクチンは接種を開始する年齢によって接種回数異なるのが特徴です。

2ヶ月以上 7ヶ月未満 :初回3回+追加1回

7ヶ月以上 1歳未満 :初回2回+追加1回

1歳以上 5歳未満 :1回のみ

5歳以上の子どもや大人には、Hibワクチンは不要です。



< 副反応 >

日本で使用が認められたHibワクチンは、フランスのサノフィ・パスツール社の「アクトヒブ」で、アメリカを含む世界各国で使用されています。他の薬物と同じようにワクチン接種にはアレルギー反応などを引き起こす可能性はありますが、深刻な副作用は非常に少ないとされています。

国内臨床試験122例482回接種における**副反応発現率は61.0%**で、その主なものは接種部位の発赤44.2%・腫脹18.7%・硬結17.8%、不機嫌14.7%、他に発熱、じん麻疹、発疹、傾眠など。

重大な副反応としてシヨック・アナフィラキシー様症状(蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫、顔面浮腫、喉頭浮腫等)・けいれん・血小板減少性紫斑病(これらは頻度不明)。

< 接種に際して知っておいていただきたいこと >

日本は、牛海綿状脳症(BSE)発生国原産のウシに由来する成分を医薬品の原料として使用しないことと決めています。このワクチンはウシ成分(フランス産ウシの肝臓および肺由来成分、ヨーロッパ産ウシの乳由来成分、米国産ウシの血液および心臓由来成分)を製造工程に使用しています。

米国産ウシ由来成分は米国農務省により健康であることが確認されたウシに由来し、欧州医薬品審査庁のガイドラインを遵守して製造されているそうで、接種による伝達性海綿状脳症(TSE)の伝播リスクは理論的に極めて低いものと考えられますが、Hibワクチン接種にあたりTSEが伝播する理論上の危険性と接種により得られる利点をご理解の上で接種していただきますようお願いいたします。

前澤クリニック 内科 小児科 0422-30-2861

天文台通! 多摩信用金庫のななめ裏